

河野裕子をめぐって 黒岩剛仁

・盆休みの薄き夕刊届きおり河野裕子の訃報を載せて 黒岩剛仁
いきなり拙作の引用から始めて恐縮だが、「心の花」の昨年十月号に出した歌である。今年も猛暑のお盆を迎え、もう一年が経ったのだな、と思う。

その間、短歌総合誌では、数々の河野裕子追悼特集が編まれてきた。私自身、河野の人柄に何度か触れた者として、感慨深く読んできたのだが、若き日から亡くなるまでの、大量に遺された作品はもとより、人柄にも想いを致す文章の多かつたことが、彼女ならではの感じた。シンポジウム等とともに活躍した同性の歌人仲間や結社の後輩たち、さらには、新聞歌壇への投稿者までにも、手紙や電話で語りかけていたようだ。平成十一年五月、NHK—BS2の番組内歌会で同席するため、九州の久留米で前日の夕方に落ち合った折のこと。番組担当者の手違いもあり、きちんと食事ができないまま打ち合わせと作品の準備などをせねばならず、出演者一同（大島史洋や歌人として参加していた坪内稔典の顔も）は夜遅くにやっと居酒屋で再集結したのだが、老若男女八人の歌人たちが不満顔ながらも何とか作業を終えられたのは、それこそ裕子さんの母親のような心配りのお蔭だった。

直近の追悼特集では、「短歌」八月号の俵万智の文章と「短歌研究」同月号の高野公彦のエッセイに注目した。

俵の文章は、「テーマ別秀歌鑑賞」として〈家族〉に焦点を当てたものである。依頼状を見て、俵は〈恋〉というテーマがないことに疑問を抱いたようだ。しかし、彼女は思い直したと言う。「恋は家族のはじまりであり、家族は恋の結果であり、さらに言えば、家族になつてからも恋をしていた。それが河野裕子」だと。夕闇の桜花の記憶と重なりてはじめて聴きし日の君が血のおと
『森のやうに獣のやうに』

この歌では、俵は「日の」という字余りにも着目する。「字余りをおかしてでもこうしたかったところに、作者の『その日』への深い思いが感じられる」と。

〈君と子らを得たる腕よさはさはと朝の夏草かき抱きて刈る〉
〔ひるがほ〕における「刈る」という動詞への言及や、〈何といふ顔してわれを見るものか私はここよ吊り橋ぢやない〉〔日付のある歌〕に関する鑑賞なども、なるほど、と思った。

・乗り継ぎの電車待つ間の時間ほどのこの世の時間にゆき会ひし君
『葦舟』

最後にこの歌を取り上げ、俵は次のように締め括る。

（前略）生前という電車から、死後という電車に乗り継ぐ間のほんのひとときのプラットホームで、私と君とは出会った。（中略）これっぽっちの時間を、これほどまでに充実できたのは他ならぬ「君」のおかげだと、結句の体言止めには万感の余韻がにじむ。そのことの奇跡のような尊さを読者も思うのである。

一方、高野のエッセイにおいては、特別な鑑賞や読みが示されているわけではない。しかしながら、河野の豊富な歌集が、決して長くはない文章で簡潔に提示されており、その世界への理解と哀惜の情を感じた次第である。